

進化し続ける イスラエル



大味 芳徳 (おおみ よしのり)

在イスラエル日本国大使館二等書記官

2011年4月、東日本大震災を経験した直後に在イスラエル日本国大使館に経済担当書記官として勤務。昨年は日本・イスラエル外交関係樹立から60周年という記念すべき貴重な年を経験。今回は、イスラエル経済の特徴やユダヤ人の考え方などを中心に、日本との間でどのような協力があり得るのか、その可能性を紹介します。

イノベーション国家イスラエル

三大宗教の聖地エルサレムがあり、世界で唯一のユダヤ教国イスラエルは、国土が南北に細長く伸びており、面積は四国程度、人口は約八百万人の小さな国だ。国土の約6割が砂漠であり、周辺にあるアラブ諸国とのいさかいが絶えないことでも知られている。

そんな地政学的に不安定で資源に乏しいこの国は、シリコンバレーさながらのハイテククラスターを持つIT先進国でもある。グーグル、アップル、マイクロソフト、インテル、サムスンといった名だたる企業がこぞって研究所・戦略拠点を設け、次々と輩出するスタートアップ企業*は世界中の投資家や企業から熱い視線を集めている。また、医療や農業分野の業績やGDPに占めるこれら技術革新のための研究開発費が世界トップクラスであることは意外に知られていない事実であろう。

ユダヤ人のイノベーション国家としての自負心は大変強く、失敗を恐れず挑戦する起業家も後を絶たない。政府によるサポート制度は充実しており、社会は失敗を許容する文化的寛容さを持ち合わせている。イノベーション国家たる環境が整っているのも世界的企業を引きつける大きな魅力となっているようだ。

彼らの気質は格式を気にせず、とても人懐っこい。物事に動じず極めて自己主張が強く、徹底した個人主義、現実主義、平等主義である。



嘆きの壁と神殿の丘にある岩のドーム

* スタートアップ企業 (startup company)
起業したばかりの企業。ベンチャー企業。

レジで後ろに行列をなしていても全く悪びれることなく店員と長々と議論している姿をよく見かける。待つ人もイライラする様子がまるでない。かといって他人に関心がないかといえばそうではなく困ったときにはすぐに助けてくれる。東日本大震災後に世界で最初に医療支援チームを派遣したのもイスラエルだった。私には彼らはストレスがまるでたまらない生活を送っているように見受けられる。事実、平均寿命は意外にも日本並みに高いのだが、これらの気質は国の置かれた状況と大きくかかわっている。

国の安全が最優先事項

常に周辺アラブ諸国との政治的緊張が続くイスラエルでは国家の安全が最優先事項であり、国家予算に占める防衛費約15%という事実がそれを物語っている。軍事技術のたゆまぬ革新の結果として民生用に転用されたものも数多く、日本でも普及しているカプセル型内視鏡やCTスキャン、がん治療に用いる冷凍装置などもこの国から産まれた。

このような環境下では格式を気にしている暇などなく、状況に応じた判断力と適切な対応が求められる。兵役は男女平等に18才から課され、米・英・仏の軍隊に比べ上級士官の比率が少なく、若い指揮官への権限委譲が進んでいる。これは必要かつ計画的な育成方法であり、こうして現場で多くを経験することで柔軟な思考が身につくのである。

兵役で培った知恵や経験は社会に出てからも活かされており、「入社後、新人であっても即戦力として活躍している」と当地でビジネスを営む日本人経営者から伺った。いわく、とにかく思考が成熟しており、問題が起きた際、指導されずとも最良な対応ができる点は日本の新入社員と大きな違いを感じるとおっしゃっていた。土壌が違うと言ってしまうえばそれまでだが、学ぶべき点は多い。

ユダヤ人のルーツ

さて、ユダヤ人と聞いてどんな姿を想像するだろう。黒髪、黒目、かぎ鼻…。そんなステレオタイプな人も

ごくたまに見かけるが、一目でユダヤ人を識別できる人がいないほど人種は多様である。金髪碧眼^{へきがん}で背も高く、白色人種とまったく見分けがつかない人は多い。それどころか、世界には正当な血筋のユダヤ人だと名乗るアフリカ人、南米人、中国人もいる。

現在イスラエルでは、ユダヤ人とは「ユダヤ人を母とする者、またはユダヤ教徒」だと規定している。だから日本人でもユダヤ教に改宗すれば、ユダヤ人になる。このようにユダヤ人を簡単に定義できない事情には、彼らが二千年もの間あらゆる土地から追い払われ、世界中に離散した歴史が関係している。

ユダヤ教の理念は、神との契約の徹底遵守である。ユダヤ人は、神と契約を交わした選ばれた民族といわれており、紀元前13世紀にモーゼの前に現れた神は、自らが唯一全能の神であると宣言し、イスラエルの民がそのことを認め、自分との契約を守るなら永遠の魂の救済を約束すると伝えた。以後、神は十戒をはじめとして様々なルールを人間に与える。それをまとめたのが、いわゆる『聖書』であり、その運用マニュアルが『タルムード』である。『タルムード』にはあらゆる問題に対する解釈、解答が用意されている。信仰についての教え、生活習慣はもとより契約書の書き方、商売の仕方、利子や利息の考え方まで社会百般の事項に及ぶ。これらは現在でも新たな考えを取り入れて上書きされている。

ユニークな発想の源

世界の人口に占める割合が0.2%と圧倒的マイノリティにもかかわらず、なぜユダヤ人はこれだけ存在感があるのか。ノーベル賞受賞者の約2割を占め、人類の英知にも多大な貢献をしている彼らのユニークな発想はどこから出てくるのか、大きく三つの理由が挙げられる。第一に民族の苦難の歴史から学んだ、教育こそが何物にも代え難い財産であるという信念。義務教育の考え方はすでに紀元前の頃から存在しており、『タルムード』には全ての町に学校を作ることが定められていた。学校に通うのは一部エリート階級のみならず

地域の子供たち全員に義務付けられ、当時からほとんど全員が読み書きができたと言われている(ちなみに、教育ママのことを英語でJewish motherという)。ユダヤ人家庭では幼い子供に儀式として、聖書に蜜を垂らしてなめさせる。「学び」とは蜜ほどに甘いということ体を感させるのである。第二に迫害され、身をなすには自ら商いをする以外に必然的に知恵を磨かざるを得なかった環境。

長きにわたって自分たちの土地を持たなかった彼らは、金こそが自分たちの命を繋ぐ道具だった。必然的に他民族に比べて金への執着心が強くなっていく。「ヴェニス商人」に出てくる狡猾な金融業者としての印象もこれに由来している。放浪の民として世界各地にいる同胞のネットワークを駆使して大きな成功を収めるユダヤ人が増えていったが、欧州各国から嫉妬を買ってしまい、結局は追放される憂き目にあうのである。そして第三にユダヤ教の教えである。天国での救済や輪廻転生を想定していない点で他の宗教と異なっており、現実的かつ合理的。教育を重視することは先に述べたが、『タルムード』など経典を徹底的に読み込み、自分で考えて思考の訓練をし、他人と議論する方法も学ぶ。とにかく他人がやっていないことに価値を見出し、先入観は持たず絶対的な価値をも疑う。常に疑問を持ち、全員賛成の議論は不成立となるなどその姿勢は徹底している。そんな彼らは発想が豊かである一方で、発想を具現化するのが苦手だ。この国の製造業が弱い要因の一つである。

灌漑農業技術の発達

さて、一見なんの繋がりもない北海道とこの国の接点を探るとすれば、農業であろうか。当地は自給率を高めざるを得ない周辺環境から、降水量が極めて少ない中で特徴を活かした灌漑農業技術が発達した。特に点滴灌水を活用した技術はわずかの水と肥料で植物の生物としての活動を活性化させ、環境にも優しいことから世界中から引く手あまたであり、毎年100カ国近い政府・企業関係者等が視察に来ているという。

なお、この国は意外にも花や緑が多くて驚く人も多い。少ない水を上手に活かしており、また、地中海に面していることから海水を脱塩化し、生活用水のみならず飲料水にも使うなど現在置かれた条件を最大限に活かそうとする発想はユダヤ人らしいと思う。

今後、地球規模での人口爆発を考えれば、食と水、環境は巨大なマーケットとなる可能性が高い。元々品質の高い北海道の農産品とイスラエルの農業技術を組み合わせれば何かすごいことができそうであるし、食、水、環境にも優れたシーズを持つこの国を一見する価値はあると思う。

G7の中で唯一の非キリスト教国として成功してきた日本に対する尊敬の念と、お互い教育水準が高いという共通点にもシンパシーを感じているユダヤ人は、日本企業や自治体が視察したいといえれば喜んであちこち見学させて世話を焼いてくれることだろう(ただし金勘定が得意なユダヤ人、将来的な損益勘定も計算済みに違いない)。懸念されるのは、日本人と気質が真逆である点だが、発想が得意なイスラエル、それを具現化するのが上手な日本ならお互い補完しあい、win-winの関係を築ける。関係強化で明るい未来を目指すチャンスではないだろうか。



点滴灌水技術によってトマトを育てるネタフィルム社は世界中に支社を持つ